

# 西安方言における上声の声調交替について

黄 當 時

漢語方言の数は多いが、『漢語方言詞滙』では18個の方言点を漢語のそれぞれの大方言区における代表的な方言点と捉え、そのうち西北方言（西北官話）の代表点として西安方言をあげている。本稿では西安方言における上声の声調交替について考察してみたい。

## § 1. 一般的な変調と特殊な変調

『漢語方言詞滙』によれば、西安方言には4つの声調があり、陰平21・陽平24・上声53・去声45となっている。また連読変調については、陰平調字が陰平調字の前において調値が21から24-（陽平本調の調値に同じ）に変わり、その他の声調字の前では変調しない、とされているが、これを表にすると次の通りとなる：

表1 西安方言の二字連読変調

上字本調 \ 下字本調	陰 平 21	陽 平 24	上 声 53	去 声 45
	陰 平 21	24-	(不變)	(不變)

この記述に従う限りでは、上声には変調など存在しないようであるが、同書の内容を詳しく見ていくと、変調例は皆無ではない。それらを取り出したものが以下の例であるが、検索の便を考え、各単語には『漢語方言詞滙』の頁数を冠し順に並べた。漢字の後の数字は、上段が本調調値、下段が変調調値であり、0は輕声を示している。

〔甲類〕

295. 洗 澡     $\text{ci}_{24}^{53} \text{tsau}^{53}$     上声→陽平-  
 327. 打冷戰     $\text{tə}_{24}^{53} \text{lən}^{53} \text{tʂə}^{45}$     上声→陽平-<sup>(3)</sup>

〔乙類〕

20. 晌午端     $\text{ʂaŋ}^{21} \text{u}^{53} \text{tuə}^{21}$     陰平<sup>(4)</sup>  
 32. 老 虎     $\text{lau}_{21}^{53} \text{xu}^{\cdot}$     上声→陰平-  
 35. 老 鼠     $\text{lau}_{21}^{53} \text{fu}^{\cdot}$     上声→陰平-  
 59. 螞 蟻     $\text{ma}_{21}^{53} \text{i}^{53}$     上声→陰平-  
 64. 爪 子     $\text{pfa}^{21} \text{ts}_{1}^{\cdot}$     陰平<sup>(5)</sup>  
 83. 水 果     $\text{fei}_{21}^{53} \text{kuo}^{53}$     上声→陰平-  
 199. 指 甲     $\text{ts}_{121}^{53} \text{təia}^{\cdot}$     上声→陰平-  
 203. 小伙子     $\text{əiau}_{21}^{53} \text{xuo}^{\cdot} \text{ts}_{1}^{\cdot}$     上声→陰平-  
 211. 土 匪     $\text{t'ou}_{21}^{53} \text{fei}^{53}$     上声→陰平-  
 311. 吵 咀     $\text{ts'au}_{21}^{53} \text{tsuei}^{53}$     上声→陰平-  
 405. 我 的     $\text{ŋə}^{21} \text{ti}^{\cdot}$     陰平<sup>(6)</sup>  
 406. 你 的     $\text{ni}^{21} \text{ti}^{\cdot}$     陰平<sup>(7)</sup>  
 439. 赶 紧     $\text{kə}_{21}^{53} \text{təiə}^{53}$     上声→陰平-

変調がなぜ生起するのか、そのメカニズムは未だ明らかではないが、一般に  
 変調現象は次の3種に帰納することができる：

(A類) いずれかの本調調値と特定される変調調値をもつもの。

(B類) いずれの本調調値とも特定されない変調調値をもつもの。

(C類) 変調しないもの。

西安方言にはB類に属するものがないので、北京方言を例にとって言えば、上  
 声214が35-に変調するのはA類に属するものであり、21-に変調するのは、B類  
 に属するものである。陰平・陽平・去声は変調しないのでC類に含められる。

さて、上にあげた西安方言に見られる上声の変調例は全てA類に属している  
 が、これはどのような意味を持つのであろうか。

このような変調例は不規則であり多くもないし、きっと他方言からばらばら  
 に借用したのに違いない、と考えて地図を広げてみるのも一手ではあるが、そ

の場合、具体的にどの方言から借用したのかを示さねばならず、簡単に解決できそうに見えて実はなかなか難しい。被借用方言が政治的・文化的に借用した側より優勢であり、且つ、パターンを同じくする連読変調があること（或いはあったこと）を示さなければならないからである。

## §2. 基層と表層

表2 変調のパターン

層 別	下字声調	陰 平	陽 平	上 声	去 声	
表 層	甲					西 安
	乙			陽平-		北 京
基 層	甲			陽平-*		(西 安)
	乙			陰平-*		西安・[北京]

表2において、表層甲は、上声がどの声調の前にあっても変調しないことを示しており、上声に普遍的な変調が見られないという点では、西安方言は、表層甲に属するものと考えてよい。表層乙は、上声が上声（或いは上声に由来する軽声）の前に来た場合、陽平声に変調することを示しており、このパターンは西安方言には見られないが、北京方言と併せて考えることは、問題を解くうえで有効と思われるため、特に設けたものである。

基層甲は、上声が上声（或いは上声に由来する軽声）の前に来た場合、陽平声に変調することを示しており、同じく基層乙は、上声が上声（或いは上声に由来する軽声）の前に来た場合、陰平声に変調することを示している。両者は共に上掲の特殊な変調例から再構したものである。

上にあげた例はいずれも普通の変調規則（表2に言う表層甲における変調規則、実際には上声は変調しない）通りの変調ではない。これらの単語がいつ頃から西安方言で使われるようになったのか、詳しくはわからないが、甲類例のために陽平声に変調したパターン（基層甲）を、また、乙類例のために陰平声に変調したパターン（基層乙）をたてたわけである。ただ、基層甲は、所属す

る例が少ないことでもあり、それらが表層乙の変調パターンをもつ方言から借用されたと説明できるのであれば、はずすこともできるであろう。括弧（ ）を附したのはそのような意味からである。当然のことであるが、基層の変調パターンは過去のものであり、その層に属す例は破読という形で散発的にしか見られず、おまけに時間の推移と共に減少する一方なので、その採集・記録は早めに行われねばならない。基層乙にも北京方言をあげておいたが、やはり上記の理由によるものである。

### § 3. 基層のひろがり

北京方言の基層は、実はここにあげた基層乙のように単純なものではないが<sup>(8)</sup>、西安方言との対照上、ここでは下字が上声である例のみを取り上げて検証することとする。例は特にことわらない限り、『新華字典』・『現代漢語詞典』から取ったものである。

#### ・体己 tǐjǐ

この単語は「梯己」とも書かれる。現代の我々の目からすれば、tǐ- と陰平声に読んでもらいたいの、わざわざ間違って発音されやすい上声字を選んで当てるのは理解しにくい、が、「体己」は表2の基層乙（或いは基層乙と同一の変調パターンを持つ方言）に属す形なのであろう。これに対し、「梯己」はこのような変調のない層（或いは方言）に属す形であり、両者ともに陰平調に発音される。

#### ・縹緲 piāomiǎo<sup>(9)</sup>

「縹緲」はまた「縹眇」・「縹渺」・「瞞眇」・「飄渺」・「飄眇」とも書かれるが、前の4例は表2の基層乙（或いは基層乙と同一の変調パターンを持つ方言）における形であり、後の2例はこのような変調のない層に属す形であらう。いずれの形も piāo- と陰平に発音される。

#### ・指甲 zhǐjia

#### ・吵嚷 chāorǎng<sup>(10)</sup>

#### ・解手儿 jiěshǒur<sup>(11)</sup>

（以上中古上声字）

・骨朵儿 gūduōr

・脚手架 jiāoshǒujià<sup>03</sup>

(以上中古入声字)

これらの例以外にも、「侮辱」という単語は、表層（表2の表層乙）の規則に従って読めば、当然 wú- と陽平声になるが、基層（同基層乙）の規則に従って読めば、wū- と陰平声になるわけであり、例があるのではないかと期待されるが、残念なことに、体已や縹緲のように破読として残ってはいない。ではあるものの、「汚辱」という単語があり、これは基層乙の変調パターンがない層（或いは方言）に属す形であって、wū- と陰平に読まれている。基層乙が存在した可能性は、このような例によっても更に確からしいものに思われる。

ところで、“関于〈普通話異読詞審音表〉的通知”<sup>03</sup>によれば、「指」は今後破読を廃し、一律に zhǐ とすることとなっている。「指甲」がこれまで zhǐ・jiǎ であったのを zhǐ・jiǎ に改めるということであるが、実際の音声としては、「哪里」と同じパターンで zhǐ-と陽平声に発音するのではなしに、「姐姐」や「奶奶」のようなパターンで半三声に読めということであろう。下字が上声の例ではないが、「指頭」もまた zhítou から zhǐtou に変わるのであろう。基層の変調パターンの痕跡が一つまた一つと目の前で消えようとして（或いは消されようとして）いるが、このような状況を目の当たりにできることは、滅多にあることではないとは言え、単純に目撃できて幸せだと喜んでいいのか、悲しむべきなのか、この操作が人為的である分、複雑な気持ちである。ただ、上の人間がいくら頑張ったところで、“約定俗成”には時間がかかり、果たしてどの程度に定着するのか、じっくり見て行きたいと思う。<sup>04</sup>

## 注

- (1) 『漢語方言概要』によれば、陰平31・陽平24・上声42・去声55である。
- (2) この変調後の陽平声と本来の陽平声とが果たして全く同じ調値を持っているのか、という議論もあると思うが、ここではこの問題には立ち入らず、両者に違いはないものとして、論を進める。以下、連読変調に由来する陰平声の調値と本来のそれとの問題についても同様に扱う。これは、客観的な観察と、話し手の主観的な意識との間にさしてずれが認められないからである。
- (3) ちなみに同じ327頁に打戦 ta<sup>53</sup> tsǎ<sup>45</sup> があり、変調していない。
- (4) 晌午端 ʂaŋ<sup>53</sup><sub>21</sub> u<sup>53</sup> tuǎ<sup>21</sup> の誤りであろう。ついでに言えば、93. 晌午飯 ʂaŋ<sup>53</sup> u<sup>53</sup>

fə<sup>45</sup> は、第二音節が轻声のためかどうか分からないが、変調していない。

- (5) 瓜子 pfa<sup>53</sup><sub>21</sub> tsɿ<sup>1</sup> の誤りであろう。
- (6) 我的 nɛ<sup>53</sup><sub>21</sub> ti<sup>1</sup> の誤りであろう（意味は「我們」）。同所には更に我們 nɛ<sup>53</sup> mē<sup>1</sup> の例があり、変調していない。
- (7) 你的 ni<sup>53</sup><sub>21</sub> ti<sup>1</sup> の誤りであろう（意味は「你們」）。同所には更に你們 ni<sup>53</sup> mē<sup>1</sup> の例があり、変調していない。なお、408頁に我的 nɛ<sup>53</sup> ti<sup>1</sup>（意味は「我的」）があり、409頁には你的 ni<sup>53</sup> ti<sup>1</sup>（意味は「你的」）があり、いずれも変調していない。
- (8) 下字声調が陰平・陽平・去声の場合、上字がどのように変調するかについては、拙稿「關於北京話上声的特殊變調」に詳しい。表2で北京に括弧〔 〕をつけたのは、ここでは上声+上声のパターンしか取り上げておらず、全てをカバーしていないからである。
- (9) 『文選』に木華「海賦」「群山縹渺，餐玉清涯。」と王延寿「魯靈光殿賦」「忽暎眇以響像，若鬼神之彷彿。」がある。飄渺は『文選』「成公綏嘯賦」「冽飄眇而清昶。」がある。
- (10) この2例は、田中秀・鳥居鶴美共著『華語破音字例解』（序文1955年，永和語学社）による。
- (11) 『京本通俗小説』「錯斬崔寧」に“叙了些寒温，魏生起身去解手。”がある。
- (12) この例は、徐世榮「普通話語音和北京土音の界限」（『語言教學與研究』1979年第1期所収）による。
- (13) 1985年12月27日公布。
- (14) 身体名称を表わす基本語彙であることを考えた場合、消されようとしている、と言った方が正確であろう。
- (15) 『新華字典』（1988年新訂第6版）には俗読が挙げられている。例えば、「外貨兌換券」の「券」は本来 duìhuànquàn 又は wàihuìquàn というふうには有気音であるはずだが、実際には誰もそう発音せず、juàn と無気音に読んでいる。恐らく「巻」から連想した百姓読みであろう。俗読を載せることは事実をありのままに捉えるという点でよろこばしいことであり、とすれば、「指甲」を zhǐjiǎ と読み、「指頭」を zhǐtóu と読むことも、将来俗読として残されるかも知れない。字書に載せるべき俗読と載せずに見捨すべき俗読との境界線をどこで引いているのか、知りたいものである。

## 参考文献

- 『新華字典』1971年修訂重排本，商務印書館1972年。  
 『新華字典』1988年新訂第6版，東方書店1988年。  
 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』増訂第2版，大修館書店1987年。  
 中国科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』商務印書館香港分館1977年。  
 北京大学中国語言文学系語言学教研室編『漢語方言詞匯』文字改革出版社1964年。

袁家驊等：『漢語方言概要』文字改革出版社1960年。

『校正宋本廣韻・附索引』芸文印書館1976年。

徐世榮：「試論北京語音的“聲調音位”」『中國語文』總第60期1957年6月号。

黃當時：「關於北京話上聲的特殊變調」『伊地智善繼・辻本春彥兩教授退官記念中國語學・文學論集』東方書店1983年。

黃當時：「北方・西北官話の聲調交替について」『外國語・外國文學研究』第7期，大阪外國語大學大學院修士會1983年。